



虹のかけ橋



第33号 / 平成24年1月



兵庫県立但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

次につながる面談を

保護者と面談する場合、何回か継続して話をするにより、信頼関係が深まり、支援に向けての大切な情報が得られる場合が多いです。また、家庭の深刻な問題についても、信頼関係が結ばれて初めてお聞きすることができるようになります。

そこで、前回に引き続き、保護者に「来て良かった」「次も話を聞いて欲しい」と感じてもらい、次の面談につなげていくためのポイントを紹介したいと思います。

学校側の人数をあらかじめ伝えておく

保護者面談には、複数の職員で対応することで、「大切な問題と考えてもらっているんだな」と感じてもらえます。対応する人数は、保護者の数プラス1名くらいが適切でしょう。面談に同席するのは、担任+学年主任、生徒指導担当、不登校担当、教育相談担当、養護教諭等の組み合わせがいいと思われます。

終了時刻を伝える

保護者の話を聞いていると、ついつい時間が経過してしまい、気が付くと「もう、こんな時間」といったこともあります。面談は、精神的にもエネルギーを消費するものです。できれば60分程度、長くても90分以内に終える方が保護者の負担も軽減できます。最初に「今日は〇〇時まで、お話を伺います」と終了時刻を伝えておくことが大切です。

保護者の雰囲気に合わせて

保護者の様子を観察しながら、「声のトーン」や「座る姿勢」「話すテンポ」を合わせることで安心感を与えます。例えば、丁寧な言葉遣いをされる方なら丁寧な言葉遣いで、リラックスして座られている場合は、こちらでも硬くならないようにゆったりと座ります。

感謝の気持ちと笑顔を忘れずに

面談が終わった後は、軽い日常会話をし、現実の世界に気持ちを切り替えて退室してもらうことも大切です。また、忙しい中、相談に来ていただいた保護者に感謝の気持ちを伝えるとともに、笑顔で別れることも大切です。そういった小さな心遣いが次の面談につながるキーポイントになります。

保護者が「来て良かった」「聞いてもらえて楽になった」と感じ、元気になってもらうことは、間接的に子どもたちに元気を与えることにつながります。

但馬やまびこの郷では、保護者だけでなく、先生方の不登校相談も受け付けています。どんな些細なことでも遠慮なくご相談ください。



〈利用者の見送り〉

スクールソーシャルワーカーとどう効果的に「つながる」のか その2：不登校の子どもたちへの支援って？

武庫川女子大学 准教授 半羽 利美佳

不登校の背景には、家庭内の人間関係や経済的な問題など、家庭の事情が関連していることも少なくありません。このような家庭にどのようにアプローチすればいいのでしょうか？今回は、具体的な事例を取り上げ考えてみましょう。

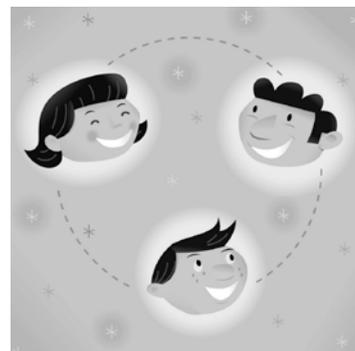


● 不登校支援の実際

小学校5年生A君の事例

小学3年生の1学期に両親が離婚したところから少しずつ欠席日数が増え、5年生に入って全欠となりました。3～4年生の担任は、欠席が続くと家庭訪問をして様子を確認していましたが、だんだん本人に会えない日が増えました。5年生になってさらに連絡がつきにくくなりました。

スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）は、A君の不登校には家庭の事情が関連しているのではないかと感じ、もう少し詳しく情報収集するため、担任とともに家庭訪問をして母親から話を聴きました。その話から、経済的に日々の生活が苦しいこと、将来のことを考えると眠れないこと、仕事を二つ掛け持ちしていてほとんど家にはいないこと、仕事から帰ると疲れてしまって何もする気力がないこと（家の中はかなり散らかっていた）、A君の不登校は気になるものの本人と話をする余裕がないこと、近隣には相談できる人もいなければ頼れる人もいないこと、学校の先生と話すときA君のことを色々聞かれ精神的にしんどくなること、などが分かりました。A君に会うことはできましたが、会話らしい会話はできませんでした。ただ、「また来てもいい？」と尋ねると首を縦にふってくれました。



これらの状況を踏まえ、担任とSSWは以下のように考えました。

- ★ A君の欠席が離婚後から増えていること、母親は離婚直後から仕事を掛け持ちし家にいないことが多いことなどから、A君はずっとさびしい思いをしている。
- ★ 家の中がかなりちらかっていること、母親不在の中でA君の生活習慣が乱れていること、A君は母親にあまりかまってもらえず孤独を感じていること、母親以外の人との接触がないことなどから、自尊感情が低下し、無気力状態になっている。
- ★ 母親は大きな経済的不安を抱えていること、そのために過重労働をしていること、不安やしんどさを誰にも相談できないことなどから、A君に対する愛情はあるものの、A君に向き合うだけの心身的余裕がない。
- ★ 担任の家庭訪問は母親に精神的苦痛を与えており、学校との接触を避けている。
- ★ A君の今の生活に何か変化をもたらすためには、家庭（母親）への支援が必要である。

そして、A君と母親に対して、まずは家庭の状況を安定させるため、①母親に対して金銭面に関する支援、②母親の精神面への支援、③家の衛生管理への支援に取り組むことにしました。また、A君に対しては、④自尊感情を高めるための支援を行うことにしました（図）。

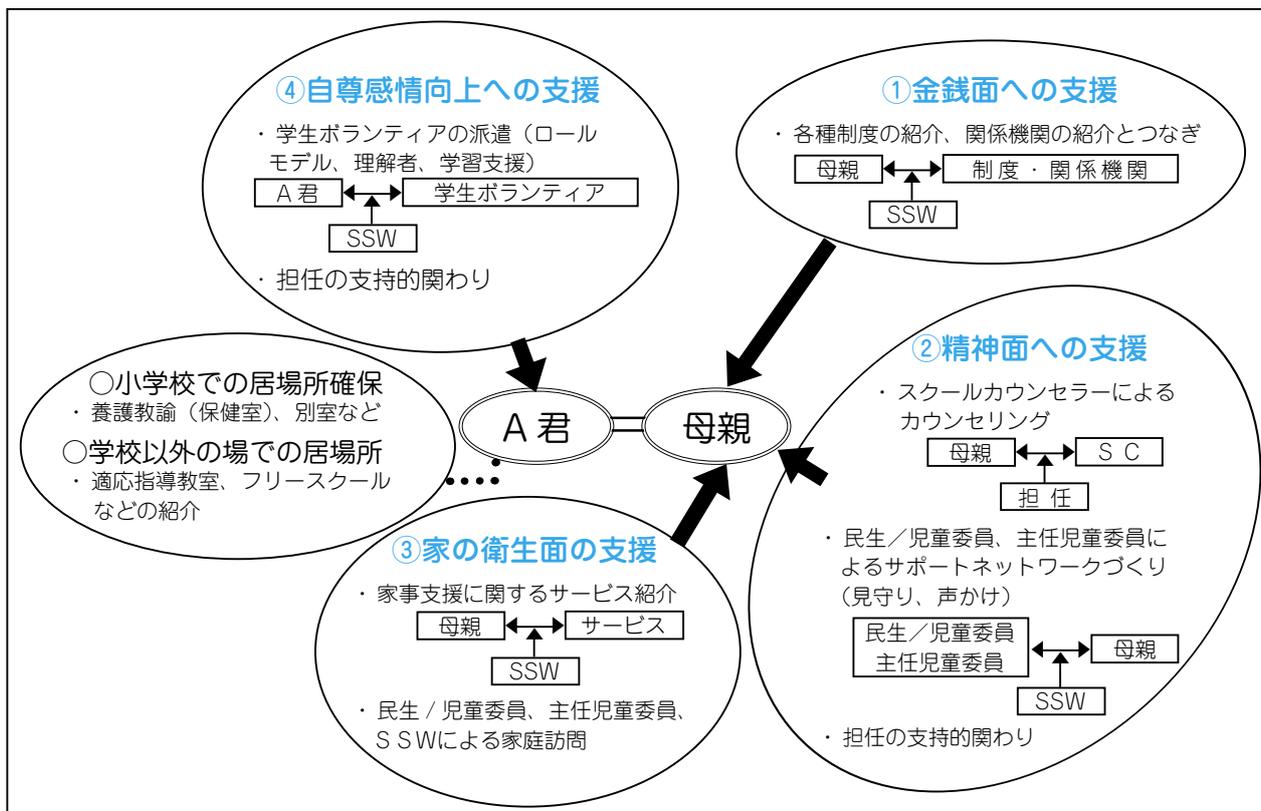


図 A君と母親への支援の概略

こうした支援の結果、母親に心身的余裕が生まれ、A君とともに過ごす時間が以前よりかなり増えました。それに伴い、A君にも笑顔がみられるようになり、家の手伝いをしたり、外に出てキャッチボールをしたり、勉強や学校にも少し関心を持つようになりました。

この変化を受けて、A君の意思を尊重しながら、学校での居場所確保に向けた働きかけや学校以外の場所での学びに関する情報提供などを徐々に行っていくことにしました。

● 不登校支援の課題 *****

ある調査では、ひきこもり者の35%が小中高校での不登校経験者でした。しかし、こうした事実がある一方で、社会人として立派に生活している不登校経験者も大勢います。ではこの違いは何から生まれるのでしょうか。

それは、本人が「自分には理解者がいる」と感じるかどうかということです。不登校の子どもたちは自尊感情が非常に低く、誰にも理解されていないと感じて苦しんでいます。しかし、「自分に理解者がいる」と感じることができ、特にそれが家族や学校の先生などの身近な人であれば、それが追い風となって新しい挑戦への動機づけが高まります。

そうした理解者を増やすために、時には家庭環境を含めた様々な要素に介入しなければなりません。そのようなときに学校とSSWがチームを組み、それぞれの専門性を生かした支援をすることで、理解者の輪が広がり、子どもたちの次の一歩を後押しするのです。

お詫びと訂正

前号で、兵庫県では現在7名のSSWが活動していると掲載しましたが、6名の誤りでした。お詫びして訂正いたします。なお、この6名は、6つの教育事務所を拠点に活動を展開しています。

研修会に参加して

但馬やまびこの郷では、「不登校担当教員研修会」をはじめ、「不登校児童生徒を支援する実践講座」などの研修会を実施し、402名の先生方に受講いただきました。

特に県内5か所で実施した「不登校に関する研修会」には、各会場とも定員を超える参加があり、活気あふれる研修になりました。

では、その報告書から、受講者の意見や感想を紹介したいと思います。

〈講義「保護者面談のポイント」より〉

- ・ちょっとした声かけや意識を変えるだけで、より多くの情報を得ることができたり、関係を深めることができたりすることに気づけて良かった。生徒指導においても、今回の研修のポイントを用いれば、子どもとのより良い関係を築いていけると思った。
- ・相づちや聞く姿勢の大切さを実感した。経験も少ないので上手く伝えることはできないかもしれないが、誠実な対応を心がけたい。

〈ロールプレイング「保護者対応の実際」より〉

- ・心配しておられる保護者の立場を理解し、しっかりその話を受け止めていくことの大切さ、また、自分に非がある場合は、あわてず冷静に、謝罪すべきことも必要であること、その子の良さを伝えたり、今後の見通しを保護者に持ってもらうことで、少しでも安心していただくことも大切だと思った。



〈不登校に関する研修会〉

但馬やまびこの郷と私

今年卒業する中学3年生の生徒が、但馬やまびこの郷での体験を作文に表してくれました。今回はその一部を紹介します。但馬やまびこの郷と出会って、自分が成長していく様子をしっかりと振り返っています。一人でも多くの不登校児童生徒が、未来に向かって一歩踏み出してくれるように、但馬やまびこの郷は応援しています。

私は、小学校6年生の時から、兵庫県立但馬やまびこの郷を利用しています。

やまびこの郷では、子どもたちの他に、スタッフの方々やフレンドリーサポーターの方々と一緒に活動します。私は、教室には入れないので、集団で活動する機会があまりなかったのですが、やまびこの郷では、私と同じような子ばかりということもあって、不思議とリラックスして活動できます。初めて出会う子も多いのですが、スタッフやフレンドリーサポーターの方々が一緒に参加してくれることで、いつの間にか、みんなと仲良くなっています。

いろいろな活動をする中で、苦手なこともたくさんあります。例えば料理。包丁を使うのが苦手で、よく指を切ってしまいます。でも、スタッフの方々にも励ましてもらったりして、チャレンジできるようになりました。失敗も笑って話すことができるようになりました。とてもあったかい雰囲気があったからだと思います。また、みんなと協力し合うことで、できた時の達成感があり、充実した気持ちになりました。

いつも思うのですが、このやまびこの郷での体験活動が私の力源になっていて、そこで充電された力が、他のことへのやる気につながっています。学校へ行ってみようと思う気持ちになったり、一人でやろうとする気持ちになったり…。中学校最後の年なので、これからそこで親切にしてもらったことを自分もできるようなになれば本当にいいなと思います。



〈調理の様子〉